

日本文化研究国際化推進構想

① ビジョンの概要

今後の日本文化研究の国際的な進展に向けて、絶えず影響し合い変化していく集合体として日本文化を捉え直し、海外の日本文化研究の多様な視点を国内の研究に採り入れるとともに、国内の研究成果を海外へ発信し、双方向の異文化間対話を創出していく。

② ビジョンの内容

海外の多様な視点を国内の研究に採り入れる方法として、国内外研究者による「日本文化」に関する学術的論考を集積した『国際日本文化研究叢書』を刊行する。同叢書を国内外の日本研究者に広く普及させることで、日本研究の新たな視座を紹介するとともに、日本研究の活性化を図る。

また、海外での日本文化研究成果のデジタル・アーカイブを活用したオンライン・データベースを構築し（パブリック・ドメインである開国以前の日本関係欧文図書の翻刻・翻訳から着手し、段階的に国内外の研究成果のDB化を進める。併せてAI機械翻訳と人手による校閲・修正を組み合わせた多言語化の手法開発も推進する）、さらに国内外の日本文化研究者が様々な研究課題を自由に議論できるオンライン・フォーラムを立ち上げ、国内外の日本研究の相互作用を創出し、日本文化をグローバルな視点で捉える土壌を築き、熟成させていく。

③ 学術研究構想の名称

日本文化研究国際化推進構想

④ 学術研究構想の概要

(1) 国際日本文化研究センター（日文研）の監修の下で国内外の日本研究者に日本語と英語で「日本文化研究」のコンテンツの作成を依頼し、その集積を『国際日本文化研究叢書』として刊行し、国内外の研究者に相互の日本研究を発見してもらうきっかけとする。

(2) 海外での日本文化研究成果及び研究対象となる資料の画像データ、また国内の研究成果を網羅的に掲載するオンライン・データベースを構築し、多様性に富む総合的な人文知を形成する。

(3) 国内外の日本文化研究者が様々な研究課題について自由に議論できるオンライン・フォーラムを実現する。

⑤ 学術的な意義

長い伝統に基づいた専門的な研究方法を用いる国内の日本文化研究においては、各文化現象について専門知識の蓄積がされてきたが、ほかの文化現象との相関関係についての考察や日本文化の全体像の俯瞰、世界の諸文化の文脈における位置づけといったグローバルな視点での研究に、多くの課題が残されている。

一方、海外での日本研究はリージョナル・スタディーズとして位置づけられ、より体系化された研究成果が生み出されている。国際理解を深めるために必要な条件は、日本文化を世界の諸文化の集合体の中に位置づけて、その関連性も含めて解明していくことである。文化の全体像を明確に把握するためには、専門分野間や地域間の橋渡しとなる研究手法の方向性を具現化する必要がある。

本構想は、このような橋渡しとなる研究の実現に向けた取り組みである。『国際日本文化研究叢書』のような、形として残る知識の体系を提供することで、国内外の研究者はそれを常に参照できるようになる。また、オンラインのプラットフォームの提供により、国内外の相互作用を常時維持し、相互作用の結果として、国内外の日本文化研究を活性化し、新たな知の視点と学術的価値を創出していく。

データ蓄積や翻訳技術の開発においても、コンテンツ収集、翻訳作業、オンライン・データベース化、データの蓄積と活用の各段階を一巡させた後は、コンテンツを順次追加し、再びこのサイクルを長期的に循環させていく。この過程を通じて、データベースの高度化やAI翻訳を活用した多言語化技術の発展と、異なる研究領域のデータ同士が相互に有機的につながっていく効果が期待される。

⑥ 国内外の研究動向と当該構想の位置付け

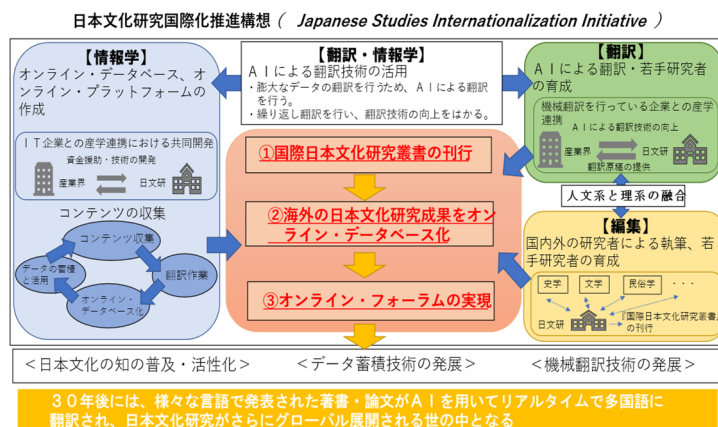


図1 日本文化研究国際化推進構想 概要図

これまでの国内における日本文化研究は、各分野領域に限定・特化した専門的知識に基づいた学術研究成果が生成・蓄積されてきたが、国際性・学際性という点ではなお成熟・発展の余地が残されている。一方、海外の日本文化研究においては、伝統的な学問体系のなかに社会学などの研究手法をも取り入れた革新的・挑戦的な研究成果が生み出されている。

異文化を背景とする研究者による視点からみた日本文化には、国内研究では気付かなかった意外な別の側面が投射される。このような海外の研究視点を取り込みつつ、国内の研究成果を海外に積極的に発信し、国内外でそれぞれの手法で独自に進展してきた優れた研究成果を相互に有機的に結び付け、双方向の学術交流を通じて世界における日本研究の融合体を創出する基盤として本構想を位置付けている。

⑦ 社会的価値

世界がグローバル化する中で、異文化間の対話が極めて重要な役割を果たす。海外の日本研究の視点を国内の研究に取り込むことにより、日本文化の独自性を投影させ、ほかの文化との共通性を見出す知的価値の付加を通じて、日本社会の国際化の促進につながる。さらに、国内の優れた研究成果を海外に積極的に発信することで、世界における日本文化理解の深化と日本研究の国際的プレゼンス向上に貢献する。

また、海外の日本文化研究の成果をオンライン・データベース上の一箇所に集積収集し、拡張させることにより、日本文化研究者コミュニティの資料調査を効率化させることにより、教育、相互理解、レジリエンスなどの点で SDGs への貢献にもつながると期待される。

加えて、新型コロナウイルス感染症のような不測の事態によって研究活動のための移動が困難になる可能性は今後もある。地理的制約を受けないオンライン上への情報集積は学術発展性を担保する基盤ともなろう。

⑧ 実施計画等について

(1) 準備期間（１～３年目） 日文研内の制度設計を検討するとともに、「国際日本研究」コンソーシアムとの連携を行い、連携・協力可能な機関や企業への連絡・協議を開始する。叢書の構成・編集や本構想のプラットフォーム構築、機械翻訳の技術革新・精度向上についてそれぞれの国際ワークショップを開催する。

(2) 始動期間（４～５年目） 編集・翻訳・情報学チームに必要な人材を雇用・編成し、計画作成を開始する。編集チームは教員と連携し叢書の構成を検討、AI 機械翻訳を活用した校閲・修正システムの開発方針を検討し、各分野の専門用語などの校閲用データベース及び修正システムのデータの蓄積に努める。情報学チームはプラットフォームと技術的課題について検討する。叢書の内容・編集やプラットフォーム構築・改良、AI 翻訳の校閲・修正システムの技術革新・改善についての国際ワークショップを開催する。

(3) 実施期間（６～１０年目） 叢書のコンテンツごとに、国内外の研究者による国際シンポを開催し、その成果を叢書に盛り込む体制を整えるとともに、海外執筆者の原稿を編集・翻訳し、叢書の最初の 10 冊を順次刊行する。DB 及びオンライン・フォーラムのプラットフォームを構築し、コンテンツの収集と公開を実施する。

日文研が中心となって実施する。日本文化研究の知識を有する編集者、トランスレーション・スタディーズ及び IT 分野の専門家それぞれ 2～3 名程度の雇用が必要である。これらの専門家と日文研教員とが連携することで、日本文化研究の国際化に関する相乗効果を得られる。在籍する専任教員 20 名が、自分の専門分野から国内外の研究者から執筆者の人選を行い、編集チームの調整の下で叢書のコンテンツを充実させる。海外の研究成果を日本語に翻訳するために、翻訳・情報学チームが連携して、既存の AI 機械翻訳を活用した効率的な校閲・修正システムの開発を進めていく。専門用語の翻訳作業では各教員の協力も得る。機械翻訳の精度向上には、翻訳対象分野のコンテンツに関連する大量の訓練データの入力が必要であるため、日文研単独ではなく、当該分野の専門家から支援を受ける仕組みを構築しなければならない。様々な分野の対訳データの収集のために「国際日本研究」コンソーシアムとの具体的な連携体制を検討していく。データの集積・活用を実現させるために、情報学チームを編成し、人間文化研究機構の人間文化研究創発センター及びデータベース構築や機械翻訳の開発に取り組んでいる国内外の企業・研究機関と連携を模索する。国内外の院生や若手研究者を積極的に関わらせる体制を整備し、研究者育成の機会も創出していく。

<総経費> 910,745 千円(概算) (1)人件費(必要人員:8名):612,000 千円、(2)海外研究員の謝金:61,665 千円、(3)DB 制作:45,080 千円、(4)叢書印刷費用等:92,000 千円、(5)その他費用:100,000 千円

⑨ 連絡先

井上 章一（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国際日本文化研究センター）